

平成23年6月6日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20700493

研究課題名(和文) 途上国の社会開発における国際スポーツNGOの「実践知」に関する研究

研究課題名(英文) A Study on International NGOs' Practical Knowledge of Social Development through Sport

研究代表者

鈴木 直文 (SUZUKI NAOFUMI)

一橋大学・大学院社会学研究科・講師

研究者番号：80456144

研究成果の概要(和文)：近年グローバルに拡大している「スポーツを通じた開発」の実践について、グローバルレベルでは様々な社会人間開発分野でスポーツを媒介とした能力開発の技術協力が進んでいるのに対して、国内ではスポーツ普及やJOCV隊員の個人的経験に限定されていることを明らかにした。南アフリカにおける事例研究では、大規模イベントが一過性の社会開発プログラムを多く生む一方で、関係者間のネットワーク形成を促し小規模NGOに発展の萌芽がみられた。

研究成果の概要(英文)：The ever-growing practice of 'sport for development' has seen more advanced progress globally, in relation to the capacity building for human and social development, than in Japan, where it has been limited to mere sport development or personal experience of JOCV volunteers. The case studies in South Africa suggested that the mega event triggered a number of short-term initiatives, while some small NGOs may have benefitted from networking between organizations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：国際協力学、都市地理学、地域社会学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：国際協力、スポーツと開発、NGO、南アフリカ、ワールドカップ

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の途上国開発においては、従

来の経済偏重のアプローチから社会・人間開発重視への転換が図られてきた。同時に、国

際社会における NGO の役割は「地球市民社会」への潮流の中で、益々高まっている。こうした中、国連が 2005 年を「スポーツと体育の国際年」と定めたことにも象徴されるように、途上国の開発援助にスポーツを役立てようという運動がグローバルに拡大している。

尤も、スポーツを社会の「改善」に利用する試み自体は決して新しいものではなく、先進国においても広く見られる。わが国の総合型地域スポーツクラブもその一例と言ってよい。これらの試みは、スポーツがそれに携わる者にポジティブな影響をもたらすという前提に依拠しており、その論理は東西南北を問わずほぼ普遍である。具体的には、健康増進、教育・雇用促進、犯罪防止、紛争解決などに資するとされ、社会関係資本(social capital)の創出機能にも期待が向けられている。しかし、これらの定説に対する社会科学の根拠は極めて希薄であると言わざるを得ない。それにも関わらず、運動は収束するどころかグローバルに拡大している。

この現状に対して、経験的証拠の有無を根拠にスポーツの社会開発への利用の是非を問うのではなく、既にモメンタムを得始めている運動を無駄にせずより効果的なものにしていくためのマネジメント理論の構築が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、スポーツによる国際援助の実践的理論、具体的には、スポーツ NGO が途上国の社会・人間開発に効果的に寄与するための組織運営のモデルを構築することを目標とした。

具体的には、

- (1) 現在世界中で拡がりを見せている国際開発スポーツ NGO の潜在的貢献度を明らかにすること
 - (2) これら NGO の活動の現状の全体像を把握すること
 - (3) 先進事例の事例研究を通して、マネジメント理論の基礎を作ること
- を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、国際開発スポーツ NGO のマネジメント理論構築に向けた基礎づけのための探索的研究として、次の 3 つの調査手法を用いた。

- (1) 国内外の途上国援助関係機関等におけるインタビュー調査
- (2) SAD データベースに基づく Web コンテンツ分析
- (3) 南アフリカのスポーツによる社会開発プロジェクトの事例研究

4. 研究成果

(1) 国際開発スポーツ NGO の潜在的貢献度

国内外の同分野に携わる研究者、国際援助機関(JICA/Swiss Academy for Development)、ネットワーク型 NGO (streetfootballworld)、青年海外協力隊(JOCV) スポーツ隊員等への聞き取り調査を行い、スポーツの社会開発への潜在的寄与について、グローバルレベルでは様々な社会人間開発分野で能力開発の技術協力が進んでいるのに対して、国内ではスポーツ普及や JOCV 隊員の個人的経験に限定されていることが明らかになった。

(2) 国際開発スポーツ NGO の全体像

当初、質問紙による定量的調査を予定していたが、技術的な困難により Web ベースでの内容分析で代替することとした。Swiss Academy for Development のウェブサイトを中心に「スポーツによる開発」に携わる国際 NGO のデータベースを作成した。この結果 HIV/AIDS 対策事業を中心に南アフリカ諸国に先進事例が多く存在し、また 2010 年 FIFA ワールドカップの影響で新規事業が多く立ち上げられていることが判明し、同地を事例研究の対象とすることとした。

(3) 南アフリカにおけるスポーツと開発

アフリカ大陸ではじめての FIFA ワールドカップ開催に世界の耳目が南アフリカへと注がれる中、スポーツを通じた社会開発の分野でも、イベントの社会的“レガシー”の一環として、政府、企業、NGO の各セクターで様々な取り組みがなされた。しかしこうしたメガイベントにともなう集中的な金銭的、人的投資は、イベントの終了とともに徐々に引き上げられてしまう傾向にある。従ってこれらのスポーツを通じた社会開発プログラムの効果も一過性のものになりやすいことが予想される。イベントの“レガシー”を持続可能なものにするための戦略が問われることになる。

そこで、次のようなりサーチクエスチョンを設定した。

1. イベントを契機として新たに開始されたプロジェクトにどのようなものがあり、それらはイベント終了後存続するのか。存続するとすればどのような形か。
2. イベント以前から既に存在していたプロジェクトは、イベントに際してどのような活動を行ったのか。また、イベント後の活動になんらかの変化があったのか。
3. 「スポーツと開発」の分野に対する継続的な投資が促進されたり、活動がより効果的になるような構造的な変化があったか。

Web ベースでの予備調査の後、2010 年 11 月 17 日から 25 日にかけて 9 日間の現地調査

を行った。現地調査は、ケープタウン（および西ケープ州）とヨハネスブルグ（およびハウテン州）の2都市を対象に行った。調査手法は、州・市政府の“レガシー”担当官へのインタビュー（計3名）、援助機関現地事務所職員へのインタビュー（2名）、「スポーツと開発」を実践するNGO関係者へのインタビュー（5団体各1～6名、計12名）、プロジェクト実施現場の観察（3プロジェクト、各1～4時間、計6時間）であった。

2010年に先立つ数年間で、南アフリカおよびその他のアフリカ諸国において様々な主体による「スポーツと開発」の実践が行われた。そうした主体にはスポーツ統括団体（FIFA、SAFA: South Africa Football Association）、国政府（SRSA: Sport and Recreation South Africa）、各開催都市および州政府、NGO、民間企業、先進国援助機関などが含まれる。FIFAのプログラムはFIFA Football for Hope Centres（FFHC）、Win in Africa with Africa、11 for Healthなど、アフリカ大陸をターゲットにしたものが多い。中でもFFHCはアフリカ全土20箇所に人工芝のミニサッカーコートを建設するというもので、その第一号が2009年にケープタウン市内の黒人タウンシップ、カイリチャ（Khayelitsha）にオープンしている。国政府や自治体のスポーツを通じた社会開発への取り組みは比較的消極的のようで、特にSAFAによるサッカー普及活動の不在を嘆く声がよく聞かれた。ケープタウン市では、コミュニティのコーチに対するトレーニングプログラムが提供され、今後も継続が計画されている。新規NGOとしては、オランダと南アフリカのクラブが提携したコーチトレーニングを展開するStars in Their Eyesや、サッカー用具の寄付やコミュニティのためのサッカー場建設を目的としたDreamfields Projectが、共に2007年に立ち上げられている。既存のNGOは、SCORE、Altus Sport、Grassroot Soccerなど大手NGOが独自のイベントを展開する一方、ドイツの援助機関であるGTZが2007年から行っているYouth Development through Football（YDF）の支援により、新規参入や零細NGOの基盤強化の機会となっている。以下では、上記リサーチクエスションに対応して、3つの特徴的なパターンを詳述する。

第一に、イベントを契機に開始された事例として、FFHCを取り上げる。同センターは、カイリチャ内のゴミ集積場の跡地にコミュニティセンターと併設される形で建設された。運営は2014年までの5年間、Grassroot Soccer（GRS）が請け負った。GRSはアメリカを本拠とするNGOで、2006年から

南アフリカで活動を展開している。サッカーを用いたHIV/AIDS教育プログラムを、主に学校と提携して行ってきた。FFHCはスポーツ、教育、健康に関するプログラムを幅広い年齢層に提供することを目的としている。施設の運営はGRSにとってはじめての経験であり、学校教育の枠内でのコントロールされた状況と異なりサッカーの要素とエイズ教育を接続することに困難を抱えていた。反面、継続的にコミュニティとの関係を築く上ではアドバンテージがあり、今後のサービス発展の可能性はある。その他の自治体主導のプログラムや新規NGOの活動の継続可能性は、慎重な継続調査が望まれる。

第二に、既存のNGOの代表として、SCOREを取り上げる。SCOREは、1995年から活動するローカルNGOである。コミュニティにおけるスポーツの組織化を通じたキャパシティ・ディベロップメントを目的とし、ボランティア育成やサッカー大会の開催を行っている。2010年はSCOREの平常の活動にとって大きな影響をもたらすものではなく、むしろ一過性のイベントが及ぼす悪影響に注意を払っていた。彼らにとっては、イベントをスタジアムやテレビで観戦することが適わないような層の若者にも、2010年が良い思い出となることが第一義的な目的であった。SCORE for 2010とよぶキャンペーンを行い、夏休みの間にSCOREが活動する各コミュニティからチームが集まって擬似ワールドカップを開催した。費用は持ち出しであり、夏休み期間にイベントを開催する経験だけが発展的な要素と考えられていた。GRSやAltus Sportは外部資金で同様にイベントを開催しているが、SCORE同様、今後の平常時の活動への影響はほとんどないと認識していた。

第三に、南アフリカにおけるスポーツを通じた開発に対して、持続的な構造変化をもたらすことを意図した数少ない活動が、2006年の開催国ドイツの援助機関であるGTZによるYDFである。YDFは2007年に開始され、2012年まで継続予定である。YDFはサッカーを通じた社会開発を行うNGOに対するノウハウの提供やネットワーク形成を通じたキャパシティ・ビルディングを目的としている。2010年には、イベント前から期間中にかけて大々的なプロモーション活動を行っている。開幕前の15日をかけて南アフリカ諸国でプロモーション・イベントを開催して回るStrong Youth, Strong Africa、開催期間中に開催各都市をヨハネスブルグの情報センターを中心に結ぶInternational Football Villageである。これらのイベントはYDFの日常的な活動とスポーツによる開発に対するメディアや民間、政府機関の注目を高めることが目的であった。日常的な活動としては、NIKEが

CSRの一環として行っている Sport for Social Change Network (SSCN) の委託 (Altus Sports に外注)、サッカーのコーチングを通じたライフスキル・トレーニングのためのツールキットの開発・普及がある。これらネットワークとノウハウ普及の恩恵は、児童福祉サービス NGO である SA Cares for Life の新規参入や、零細 NGO である Dona's Mates の活動支援の形で観察された。これらの小規模な取り組みの中長期的な展開については継続的な調査が必要である。

南アフリカにおける「スポーツと開発」の実践は、総じて NGO セクターの自発的な取り組みに依拠しており、政府セクターの関与は限定的なものに止まっている。既存の NGO の中で既に安定的な活動を展開してきた団体は、2010 年を機会に通常の活動の延長でイベントを行ったが、中長期的な影響を期待されていない。小規模な団体や新規参入団体にとっては大きなネットワークに接続されることで発展の機会になっている可能性も示唆された。それらの団体が継続的に発展していくために、政府や企業セクターの継続的関与を促す可能性について探索することが今後の研究課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

①鈴木直文、第 1 回「スポーツと開発」研究会、南アフリカにおける「スポーツと開発」の実践への FIFA ワールドカップの中長期的影響、2010 年 12 月 22 日、大阪大学

②鈴木直文、第 2 回スポーツコミッションシンポジウム、社会的弱者のためのスポーツ・プログラム—スポーツで「地域」はよくなるか?—、2010 年 9 月 24 日、東京都中小企業振興公社

③ Mio Azuma and Naofumi Suzuki (2009) 'Building Capacity for Sport Development? An Analysis of the Use of Sport in Overseas Development Assistance: A Case of the Japan Overseas Cooperation Volunteers' 日本スポーツ社会学会年次大会、2009 年 3 月 24 日、関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 直文 (SUZUKI NAOFUMI)

一橋大学・大学院社会学研究科・講師

研究者番号：80456144